平成２６（２０１４）年１１月２０日発行

塩谷郡市医師会だより

Vol. 76

一般社団法人　塩谷郡市医師会
広報委員会
〒３２９－１３１２
さくら市桜野１３１９番地３
さくら市氏家保健センター内
ＴＥＬ ０２８(６８２)３５１８
ＦＡＸ ０２８(６８２)５７６０

Contents

1　第10回市民公開講座
2　栃木県郡市･大学医師会正副会長懇談会
3　平成26年度第3回役員会報告
4　学術講演会報告
5　シリーズ「 塩谷医療史」16

第10回塩谷郡市医師会市民公開講座開催

平成26年11月9日(日) 第10回塩谷郡市医師会市民公開講座がさくら市氏家公民館で開催された。生憎の雨模様にもかかわらず、約500名の参加者があった。第1部はさくら市出身の落合崇史さんと白滝はる奈さん、中村浩子さんの「MUSIC FOR JOY～心が喜ぶ音を探して～」と題したミニコンサートで、白滝さんのソプラノの歌に五感が震えるような感動を味わった。

第2部の基調講演はさくら市出身で国立がんセンター中央病院副院長の小菅智男先生による「内視鏡の届かない消化器　肝臓・胆道・膵臓のがん」であった。日本のがん治療の頂点で活躍されている小菅先生は、医療的にも大変困難な部位のがんについて気さくな感じで大変わかりやすく話をしてくださり、講演後は会場から多くの質問が出た。また、小菅先生が地元出身ということもあり、地元有志からの花束贈呈があったり、同級生や知り合いの方に囲まれて昔話に花が咲く場面もあり、大変和気あいあいとした講演会であった。

栃木県郡市・大学医師会正副会長懇談会

栃木県郡市・大学医師会正副会長懇談会が11月1日(土) 塩谷町の「星ふる学校 くまの木」で開催された。この正副会長懇談会は栃木県内の各医師会が順番で当番幹事となって毎年開催されているものである。星ふる学校くまの木は廃校になった元小学校で、きれいな星の観察ができる場所として宿泊学習などに使用されている。

当番幹事である本会の山田会長の挨拶に続き県医師会の太田会長の来賓挨拶があり、尾形副会長の司会で懇談会が進められた。協議事項は宇都宮市医師会から出された「受動喫煙防法制定に関する要望書」と本医師会が提出した「美しい自然と清らかな水を守るしおや宣言について」であった。

本医師会は塩谷町の高原山に最終処分場を建設することに反対することを表明しているが、この宣言は医療人として豊かな自然や清らかな水を守ることが地域住民がこの地で安心して生活し、健康を守ることにつながるという立場から建設に断固として反対する宣言であり、全会一致で賛同が得られ、オブザーバー出席の太田県医師会長の賛同も得られた。

懇談会の後、狭い食堂で小学生に戻った気分で和やかに懇親会が行われた。天気がよければ校庭で星空観察の予定であったが、あいにくの天気であった

塩谷郡市医師会ホームページ／メール	広報委員会編集部	医師会事務局
ＵＲＬ http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/	岡　一雄　r2d2@msh.biglobe.ne.jp	粂川 kumekawa.shioya@gmail.com
メール shioya@tochigi-med.or.jp	尾形新一郎　ogata@o-ga-ta.or.jp	高橋　takahashi@e-shioya.jp

ため、高根沢町のアマチュア天文家である菊池庸夫さん、小原宏明さんらによる天体観察のシュミレーション、高橋雄二先生の星空観察の趣味を紹介した「星の観察の醍醐味」などが披露され、室内で広大な宇宙に触れることができた。また、懇親会にはさくら市押上出身、星空写真家で内科医の長嶋厚樹先生も駆けつけてくれた。

なお、この懇親会に合わせて塩谷郡市医師会では記念品として会員が撮影した天文写真を使用した「星の繪葉書」を作成した。

平成26年度第3回役員会報告

平成26年10月6日(月) 午後7時から医師会事務室で開催された。

出席者：山田会長・尾形副会長・岡副会長・阿久津・佐藤・半田・髙橋・植木・手塚・早川・村井・仲嶋

第1号議案 栃木県郡市・大学医師会正副会長懇談会について

11月1日(土) に行われる郡市・大学正副会長懇談会の準備について報告された。

第2号議案 第10回市民公開講座について

11月9日（日）にさくら市で行われる市民公開講座について進捗状況が報告された。

第3号議案 塩谷町の指定廃棄物最終処分場について

塩谷町上寺島に放射性廃棄物を含む指定廃棄物の最終処分場を建設することに塩谷郡市医師会として反対表明したことが報告された。また、白紙撤回の署名に協力することになった。

第4号議案

①栃木県国民健康保険診療報酬審査委員の補充については本医師会からは新たな推薦者がなかったことが報告された。

②おとな・こども診療室については、昨年同様協力医師にアンケートを行うことになった。

③緊急の災害時に活動するJMAT、DMATについて本医師会では従来取り組んでいなかった救護班の設定、広域行政との協定などについて決めていくこととなった。

学術講演会1
「経口糖尿病薬の主役と脇役：SGLT2阻害薬の位置づけ」

日時：平成26年6月10日
講師：自治医科大学　内分泌代謝学部門
准教授　長坂　昌一郎先生

ここ数年、生活習慣病の中で糖尿病ほど治療薬の種類が画期的に増えた病気はないと言えるだろう。DPP4阻害薬が出たのがついこの間だと思ったら、この春からSGLT2阻害薬が保険適用となった。ただ、この薬は腎臓の尿細管に作用して糖の再吸収を抑制して尿中に糖を多く排出することで血糖値を下げる作用を持つため、従来の糖尿病薬と同列には語れない点がある。この辺の所を長坂先生は長所と短所、使用法のコツなどをわかりやすく説明してくれた。

学術講演会2
「痛風・高尿酸血症診療の最近の考え方」

日時：平成26年9月9日
講師：自治医科大学　内分泌代謝学部門
主任教授　石橋　俊先生

生活習慣病の一つとして、あるいはCKDの原因疾患の一つとして再注目されている、古くて新しい病気である痛風・高尿酸血症について基本的な事からわかりやすく説明していただいた。単にプリン体の摂取量ではなく、アルコール摂取や砂糖入りソフトドリンク摂取量に比例して痛風発作が多いとか、逆にコーヒーや牛乳摂取量が多くなると発作が少なくなるなど、患者さんの指導に役立つ内容であった。

学術講演会 3
「C 型肝炎の最新治療」

日時：平成 26 年 10 月 7 日
講師：那須赤十字病院消化器内科
部長　佐藤　隆先生

C 型肝炎感染者は日本では 150～200 万人いると推定されているが、慢性化し肝がんに発展するのを防ぐことが肝要である。この分野の治療はまさに日進月歩でありガイドラインが半年で改定される場合もあるという。インターフェロン、ペグインターフェロン、リバビリンとの併用に加えて、新しいダグラタスビルとアスナプレビルの内服併用療法について県北地域の第一人者である佐藤先生がわかりやすく講演してくれた。

学術講演会および納涼会
「心不全における水利尿薬：トルバプタンの役割について」

日時：平成 26 年 7 月 25 日
講師：新小山市民病院循環器内科
副部長　河野　健先生

過剰な体液貯留によるうっ血性心不全の治療は従来の利尿剤には反応しにくいため、治療に難儀していた。ところが近年、強力な水利尿作用を持つ V2-受容体拮抗薬（内服薬）であるトルバプタンが臨床現場で使用できるようになり、うっ血性心不全の治療が大きく変わった。入院数日でトルバプタン使用により画期的に心不全が改善する実際例を河野先生は示してくれ、大変刺激的な講演会であった。

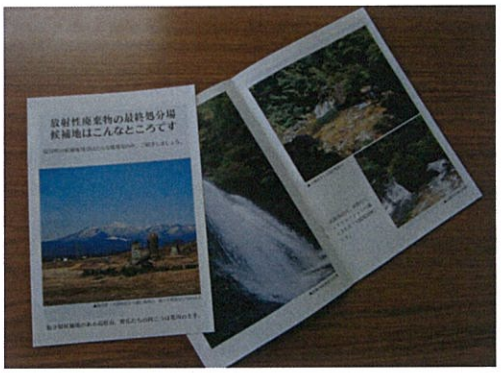
講演会の後、河野先生を交えて納涼会を兼ねた懇親会が開かれた。

星の繪葉書作成

高根沢町の高橋雄二先生、さくら市の花塚和伸先生、さくら市出身で内科医、星の写真家の長嶋厚樹先生（故長嶋元重先生のご長男）の 3 人の先生に星の写真を提供していただき、8 枚組の星の繪葉書を作成しました。会員の先生方には 2 部ずつお送りしますので、秋の夜長に星の世界をお楽しみください。

～放射性廃棄物の最終処分場候補地はこんなところです～

塩谷町の戸村光宏先生ら有志がこの度「放射性廃棄物の最終処分場候補地はこんなところです」というパンフレットを作成した。パンフレットに載せられた現地の写真を見ると候補地周辺が豊かな自然にあふれ、清らかな水が流れる場所であることを知ることができ、こんな場所に処分場を建設しようとすることがいかに浅はかで愚かであるかよくわかる。ぜひ各医療機関で一般の方に配布してください。



シリーズ　塩谷医療史 -16-

五味淵医師の見たスペインかぜ（2）

大正7年11月に第一次世界大戦が終わる。11月中旬まで五味淵の周囲では重症者は出なかったが、この頃近隣の大宮村（現塩谷町）では肺炎で死亡する者が相次いでいたことがわかる。往診の依頼を受けた五味淵が大宮村に赴き、その惨状を初めて知るのである。

「甚だしきは夫婦共斃れ愛児三人を残せりと悲報－中略－往診せるに戸毎の如く患者は枕を並べ三人五人累々として瓜田の如し」

治療の甲斐なく家族に一人は命を落とした。さらに片岡村安澤（現矢板市）にも隔日くらいに往診に出かけたが、11月から12月の二ヶ月間に戸数約110戸の村落で約30人が死亡した。五味淵の往診の一日を記した部分がある。

「12月11日午前10時頃より初雪降りしも早朝この安澤に2軒往診の依頼を受け降雪後間もなく自転車にて出発し途中2軒回診し午後2時頃安澤に入るや降雪のため人家はたいてい戸を閉じて物寂しきを感ぜりこの時ある家の軒下に人力車ありていかにも医の来診中なるかを推察せしむをみて予定の病家に至れば2、3日前若き嫁は妊娠の身にて罹患したために流産して死したるも病人あるがためにその里に依頼して葬式おえたるのみなり然るに39歳の妻また肺炎で苦しむこと数日にして各医皆匙を投ずと余これを診するに今宵を保たざるべきを察すそれより診を乞うもの先を争い前後8軒の診察をなしたる時は暮色暗々たり」

その後帰路についた五味淵は小酒屋の前を通り過ぎる時に中から酒を飲んで談笑するのを聞き空腹のため流涎が止まらず、医師という職業に就いたばかりに雪の中を往診する身を嘆くが、途中で再び先ほどの同業者の人力車をみて医師としての誇りを取り戻す。そしてようやく夜の8時に帰宅すると、11月28日から発病し肺炎を起こしていた家の子守として働いてくれていた奉公人の女の子が重体となっており、翌朝15歳で不帰の客となってしまう。なんとも身につまされる経験である。

五味淵は「内科肺炎科耳鼻咽喉科」を標榜していたがスペイン風邪の症候について前駆症状から症状、顔貌の変化に始まりその後の症状の変化、胸部の理学所見、合併症にいたるまで詳細に記載している。また病原性の変化については初期の流行中は数日で治癒するものが多かったが、11月下旬からは一週間から十数日、または数十日の経過をたどるものもあり、これは再発傾向が多いからだとしている。

当時スペイン風邪の原因は確定されていなかったが、インフルエンザ菌、肺炎双球菌説、ジフテリア説などがあり、五味淵は伝染力の強烈さや症状からジフテリア類似の細菌と推測し、ジフテリア血清注射の実験を試み、確効を得たと記している。ジフテリア血清療法はベーリングと北里柴三郎が明治23（1890）年に発見したもので、当時日本でも使用されていた。現在の医学の常識からは、新型インフルエンザにジフテリア血清療法が効いたとは考えにくいが、他に有効な治療手段がない以上、目の前の命を救いたいという一心で行った五味淵の実験的治療を責めることはできない。

これには後日談がある。大正8年3月の塩谷郡医師会総会で五味淵医師が行ったジフテリア血清療法が「五味淵医師予防接種の件」として議題に取り上げられたのである。おそらく一部の医師からクレームが付いたのであろうが、会議では血清療法を諸種の疾病に応用することは医師の間で行われていることなので問題なしとされた。

さて、現在のわれわれは高病原性の新型インフルエンザがいつ出現してもおかしくない状況に置かれており、国を挙げてその対策が練られている。

五味淵医師が遺してくれた生の記録「大正七・八年ノ世界的流行性感冒ノ見聞録」はわれわれ医療者にいろいろな示唆を与えてくれる貴重な歴史的資料である。しかし、残念なことに国会図書館に一冊確認できるだけである。地元矢板はもちろんのこと、もし、見つけた方がいたらぜひ塩谷郡市医師会までご一報お願いします。　（担当：岡　一雄）